



Title	近代日本のデザインとジェンダー : 手作りインテリアの意味をめぐる考察
Author(s)	神野, 由紀
Citation	デザイン理論. 2018, 72, p. 79-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70567
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代日本のデザインとジェンダー — 手作りインテリアの意味をめぐる考察 —

神野由紀

キーワード

手作り, ジェンダー, インテリア, 近代日本
Handmade, Gender, Interior, Modern Japan

- 1 はじめに
- 2 『ジュニアそれいゆ』における手作り
- 3 『ジュニアそれいゆ』から『私の部屋』へ
- 4 おわりに

1 はじめに

大量生産と大量消費を前提とした近代以降の生活において、どのようなジェンダー化されたデザイン表象が生み出されてきたのか、これまで少女のための商品デザインの歴史的背景に関して考察してきた。そこで残された課題が、既製の商品だけではなく女性たちの手によって作られる様々なものの意味を明らかにすることであった。本研究では、戦後の若い女性を中心とする手作り志向とそのデザイン的特性に焦点をあて考察する¹。

女性にとっての裁縫は自家裁縫の時代にあつては生活に必要な仕事であったが、大量生産が進行し既製服が普及していく中、必須の家事ではなくなる。しかし多くの女性たちは、自分たちの針仕事を手芸という趣味の形に変えながら継続し、特に既製服が一般的になるにつれ、女性の手芸の対象はインテリアに向けられていく²。このような変化を辿るとき、1950年代末頃からの女性の手作りに対する態度は、それ以前と大きく区別して考えるべきと思われる。

本研究では裁縫から解放された女性たちが様々な手段でのインテリアの手作りに向かっていく状況、さらにはそれが再び手芸というジェンダー化されたジャンルに収斂していく様子について、1950年代から1960年代初期、若い女性にむけての手作り記事の多かった『ジュニアそれいゆ』と、同誌の手作りインテリア志向を1970年代に継承した雑誌ともいえる『私の部屋』を調査対象とした³。これらの雑誌はどれも、少女あるいは若い女性たちに美しい暮らしを提唱し、身の回りのものをその美的価値観で作り出していくという傾向を見せており、同時期に大衆化していく男性の「自作」と呼ばれる模型趣味、ラジオ・オーディオ製作趣味などと明確に区別されていく。どちらも大量生産品で代替できる時代にあつて、あえて手作りする趣

本稿は第232回例会（2017年11月18日、大阪工業大学）での発表に基づく

味であるといえるが、今日に至るまで両者における作ることのジェンダー化については自明のものとして、それ以上の検討はなされていない。そこで、この研究では若い女性たちが何を作り、どのようなデザインを志向したかを明らかにし、20世紀後半に大きく変化した手作りの意味とジェンダーの再編の過程を検証した。

2 『ジュニアそれいゆ』における手作り

戦前から『少女の友』の挿絵で少女から人気を集めていた中原淳一は戦後、自身の雑誌『それいゆ』『ひまわり』『ジュニアそれいゆ』を次々と創刊し、イラストだけでなくファッション、人形制作、インテリアなど、多方面で活躍した。中でも『ジュニアそれいゆ』は、刊行期間は短いものの、10代の少女たちにそれまでになかった「ジュニア」という概念を用いて、その後の彼女たちの生き方の指標となるような生活規範、美的感性を誌面で説き、中流上層家庭の少女たちに人気を博した。全39号の記事内容（記事総数1874）の特徴は、小説など文学的な読み物、芸能人・読者モデルの紹介、ファッション情報などが目立つが、それらと同じく毎号目立っていたのが手作りに関する様々な記事であった（表1）⁴。

表1 『ジュニアそれいゆ』記事内容の内訳

小説、読み物、文学論、詩など	480
芸術（美術、バレエ、演劇、音楽、映画など）	77
芸能人	178
読者モデル	110
ファッション（情報のみ、作り方ではない）	176
ライフスタイルの提案（生活規範、身だしなみなど）	260
手作り	430
その他	103
読者ページ	60
（総数）	1874

2-1 『ジュニアそれいゆ』の手作りインテリア記事

1950年代の洋裁ブームを反映して、当然のことながら『それいゆ』とその姉妹誌『ジュニアそれいゆ』ともに流行ファッションのパターンを紹介する記事も多く見られるが、それと同じくらい目立っていたのが、手作りのインテリアに関する記事である。インテリア関連の記事は、手作り記事430件中113件を占め、同時代の少女のほとんどがまだ個室を持てなかったにもかかわらず、非常に多いといえる⁵。そこでインテリアの記事について、このような記事内容の調査を行った。

調査対象：『ジュニアそれいゆ』1号（1954年）～39号（1960年）、ひまわり社

臨時増刊『アップリケと工作』（1960年）、『楽しい日曜工作』（1958年）⁶

調査項目：手作りに関する記事（うち113件のインテリア記事の内容調査）

抽出されたインテリア記事について、特に目立った3つの特徴について、以下で詳述する。

2-1-1 布を使った手作りインテリア

『ジュニアそれいゆ』の手作り関連記事に最も多く見られたのが、アップリケである。布の上に別の小さな布を縫い付け、模様にするアップリケの手法は、布地の補修・補強としてだけでなく、装飾としても用いられるが、中原はこ



図1 『ジュニアそれいゆ』5号 1955年

のアップリケを洋裁や既存の衣服のアレンジだけでなく、バッグ、クッション、座布団カバー、こたつ布団カバー、額絵、カーテンなど、様々なものに用いている（図1）。『ジュニアそれいゆ』や『それいゆ』では、人気のテーマは必ず臨時増刊が出されたが、アップリケについても同様で、1960（昭和35）年『アップリケと工作』が刊行されている。

中原は、刺繍などお稽古事をしなければ習得できない手芸に対しては批判的であり、家の中が、手芸作品で埋まって「手芸展示会場」と化し、結果的にインテリアの統一性を欠いてしまう状況になっていることも問題であると述べている⁷。中原は、そのような特別な技法は不要で、誰にでも、材料も端切れと糸さえあればできる、「それでいて絵を描いているようなたのしさ」があると、アップリケを推奨する。さらに図案についてもできるだけ難解なものではなく、単純で親しみやすい「ちょうど子供がかいた絵のようなもの」であるべきと述べている。結果的にアップリケのデザインは、少女や動物、花などすべてデフォルメ・抽象化・幼児化が目立った「可愛い」ものになっている。こうしたデザインのデフォルメは内藤ルネ⁸のイラストで決定的となるが、それに先行して、アップリケという手法においてデザインに立ち現れていたといえる。アップリケのデザインが一時代前の手芸のデザインと大きく異なることで、少女たちはデフォルメされた可愛さだけでなく、そのデザインの斬新さを戦後の新しい時代と重ね合わせていたと考えられる。

アップリケは、スカートやブラウスなどの衣服に自分らしさの「しるし」を付けるものもあるが、誌面で紹介されている多くはインテリア雑貨類であった⁹。これは既製服が流通し始め、女性の手作りが次第に洋裁ではないものに向けられていく、過渡期の状況を示しているといえる。中原だけでなく、松島啓介や内藤ルネなどもこの手法を積極的に用いており、男性の手によって可愛いデザインのアップリケが刊行期間を通じて考案され、手芸の大衆化を促していった。

2-1-2 工作インテリア

臨時増刊『アップリケと工作』では、タイトルの通り後半部分には、工作が紹介されている。

また1958年には、ひまわり社から『たのしい日曜工作』¹⁰（片山龍二著）が刊行され、若い女性の間で工作の人気も高かったことを示している。本誌調査でも、手作りインテリアの記事のうち、工作と呼ぶべき内容が多く含まれていることが明らかになった。しかも工作記事47件中、木工は20件を占め、中には本格的な大工仕事を伴うようなものも紹介されている。女性の手作りは針仕事の様な手芸が主であるというのが一般的な考え方であった。家庭科教育の男女差の解消が実現するのは2002年以降だが、少なくとも戦後の民主主義思潮がアメリカ主導である程度広められていた戦後しばらくの間、ジェンダーに捉われない現象が見られた。

1950年代後半から1960年代において、女性であっても自ら鋸や金槌を手にして家の中のものを製作することは、男性同様に推奨されていた。『ジュニアそれいゆ』では、例えばレターラックから本棚、さらにはもっと大きなものま



図2 「ジュニアそれいゆ」14号 1957年

でを女子中高生がつくることを前提で紹介されている。14号では「Mr. Joyの小住宅」（図2）という記事の中で、犬小屋作りが紹介されている（図2）。木材だけでなく、廃品などを用いた様々な工作も非常に多く見られる¹¹。

工具を伴う手作りは、日本では高度経済成長期の職人不足を背景に、住まいの修繕や家具製作などを自分で行うことから始まる。それは多くの場合は男性が休日に行うものとされ、「日曜大工」と称されるようになる¹²。そして人々の生活が豊かになるにつれ、男性による家庭内での好ましい余暇としての工作趣味となっていくが、こうした見方自体がジェンダー・バイアスによるものであることを、少女雑誌の工作記事の多さから確認することができる。

2-1-3 ディスプレイ

インテリア記事でもう一つ特徴的だったのが、部屋を美しいディスプレイで装飾する、という考え方が多いことである。在来の日本の家屋、特に中間層の多くが住んでいた接客中心の住まいにおいて、床の間の調度品は男性が選定するものであった。戦後になると特に女性が住まいのインテリアの担い手となっていく中で、女学生も自らの暮らしを美しく「少女らしく」整えていくことを、雑誌では提唱している。そのディスプレイは、戦前の男性的な顕示的美術品ではなく、[可愛い][自分らしさ]が表されるための、手作りから既製品までを用いた内容となっている。機能から離れ、純粋に商業ディスプレイのような飾り方が多く、夏には貝などを使ったディスプレイ、クリスマスにはツリーやキャンドルを使ったディスプレイなど、季

節に合わせた事例が紹介され、マッチ箱やコップ、空き缶など、廃品などを上手に利用し、そこに手を加えたものや、ただ配置を考えるものまで、多様な提案が見られる。特に壁面をどう飾るか、というテーマは最も多く、額縁や棚



図3 『ジュニアそれいゆ』12号 1956年

の製作だけでなく、額の中に飾る絵やコラージュ、アップリケなどもすべて自分らしさを表現するために、少女自らがデザインするものとなっている(図3)。

暮らしを美しく彩るものを自ら演出するという行為は女性の自己表現の発露となり、その延長上にはアートと手芸の混在した世界が展開される。誌面ではアートと手芸の区分は極めて曖昧であり、芸術的行為という意識のもとで、手芸が「良い趣味」として承認され、女性によるファンシーなデザインもまた、大量に住まいに持ち込まれていくその後の流れをつくっていった。

2-2 中原淳一と片山龍二 男性によるジェンダーの再確認と解体

『ジュニアそれいゆ』の特徴のひとつが、男性の書き手の多さである(男性946 女性539 不明490)。中原淳一にはじまり、内藤ルネなど、初期の少女的なイラストの描き手はみな男性であることは知られているが、手芸的な針仕事の手作りも男性による提案がほとんどであった。中原、内藤によるアップリケのデザイン、松島啓介による人形制作など、そのデザインはどれもその後の少女の「可愛い」キャラクターデザインの基本パターンとなるようなポップで単純化されたものが多くみられる。中原は自らの手芸についての考え方を、次のように述べている。

「女性が女性らしいということは、男が男らしいということが魅力であるのと同じように、いつの時代にも捨て去ることができないよさだと私は考えるから、手芸をしようとする心が、その女らしさをつくるもののひとつとして私の眼にうつるのだ。」¹³

この言葉が示すように、男性の立場で制作しつつも、中原は近代的なジェンダー観の中で手芸を「女らしさ」を表すものと捉えていた。

しかしながら、工作の領域になってくると、その記事内容は「女らしさ」から逸脱していくことになる。多くの男性の書き手の中で、同誌の可愛い工作記事を担当したのが片山龍二

(1915- 没年不明) という人物であった。片山(本名: 南谷勝敏) は多様な経歴をもち、ひまわり社の雑誌の中では工作に関する記事を多く担当している。日曜大工的な廃品を使ったアイデアなどを紹介しているが、男性的な日曜大工とは異なる、ど

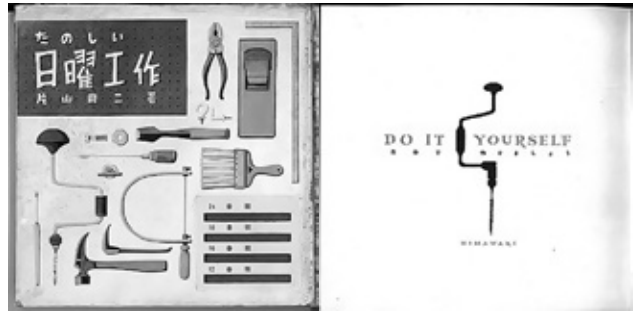


図4 『楽しい日曜工作』 表紙(左)と中表紙(右) 1958年

れも装飾的で少女趣味的な可愛らしい工作デザインである。こうした記事が目にとまり、朝日新聞で「日曜大工」という連載を担当、さらに森永製菓のテレビ番組「暮らしのセンス」も担当するようになった¹⁴。前述の『楽しい日曜工作』は片山の著作であるが、中表紙及び裏表紙には副題として「DO IT YOURSELF 自分で作りましょう」と書かれており、片山がかなり早い時期から海外のDIYの影響を受けていたことがわかる(図4)。

『ジュニアそれいゆ』は短命で終わるが少女たちに与えた影響は大きく、その後の少女趣味の源流となっていく。ここで女性の手芸は、確かに洋裁を継承して「女らしさ」の実践として位置づけられたが、同時に次の「ウーマン・リブ」の時代を予見するような男女区別のない工作も排除されることなく混在していた。片山にとっては、「可愛い」デザインは新たなマーケットとして注目したにすぎず、またDIYにしても後述する対抗文化の中で大きく発展していった工業社会批判としての手作りの推奨ではなく、消費社会の中での創意工夫でしかなかった、という見方もできる。しかしそれでも、『ジュニアそれいゆ』で紹介された可愛い手作りデザインは、多くの少女たちに「少女的なもの」として熱狂的に受け入れられていく。『ジュニアそれいゆ』で見られた手作りやジェンダー意識の混在は、次に述べる1970年代になっても引き継がれていった。

3 『ジュニアそれいゆ』から『私の部屋』へ

3-1 若者のインテリアへの関心の高まり 『私の部屋』創刊の時代

『ジュニアそれいゆ』における手作りのインテリアへの関心は、その後1970年代に『私の部屋』でさらに発展していく。1972年創刊の『私の部屋』は当時10代後半から20代といった若い女性を読者層としたインテリア雑誌である。

若い女性の間での、インテリアへの関心の高まりは、女性の進学、就職状況の変化が背景にある。日本における女子の大学・短大進学率は、1960年ではわずか5.5%であったのが、1970年代に入る頃から急増しはじめ、1970年には17.7%、70年代半ばには3割を超える¹⁵。就職、

あるいは大学進学を機に地方から上京して一人暮らしを始める女性も増え、さらに親と同居の場合でも子供部屋の保有率は1970年代前半には8割に近づき、姉妹あるいは一人だけの個室空間を持つ未婚の女性が、自身の身の回りのインテリアに関心を抱くようになっていった。創刊号の巻頭文には「〈私の部屋〉からあなたへ、あなただけの空間、すてきな部屋づくりのためのメッセージで特集しました。」とあり、記事からは「こんな女の子のいる部屋」「私をはじめもった部屋」など、個人空間を持つことでインテリアへの関心が高まっていった当時の様子がわかる。

全120号の誌面は、ほとんどが手作りに関する記事で占められていた。創刊当初は一人暮らしの若い女性を対象としていたが、間もなく同誌は読者の成長にあわせて新婚家庭、さらには小さな子供のいる家庭の主婦をも読者対象に取り込んでいった。

3-2 『私の部屋』における手作り記事

同誌はインテリアに特化した雑誌だが、読者対象が若い女性であるということ、「美しい暮らし」を情緒的に提案していく姿勢、手作りに関する記事の多さなど、『ジュニアそれいゆ』『それいゆ』との共通点は多く、雑誌の寄稿者には内藤ルネやクニエダヤスエなど、『ジュニアそれいゆ』と重なる人物もみられる。そこで本研究では、このような2誌を比較検討することで、女性の手作りへの意識の継承と変化について分析を行った。

調査対象：『私の部屋』1号（1972年）～120号（1990年）、婦人生活社
（欠号：17, 58, 76, 77, 82, 85, 87-90号）

その結果、創刊から終刊までの同誌の手作り記事は、大きく2つに分けることができた。

3-2-1 DIY思想の時代

創刊から1977年頃まで、『私の部屋』では、クッションやカーテン作り、刺繍、キルトといった手芸分野と工作分野が共存しているが、そのどちらも包含するものとして「DIY」という語が用いられている。1973年8号では、「DO IT YOURSELF 手作りのインテリア」という特集が組まれており、この号以降、この種の手作り記事にはキューピー人形と工具が配されたオリジナルのマークが付けられている（図5）。戦後復興を自分たちの手で行うというロンドンの市民運動から始まったDIYは、その後アメリカに渡り、ホームセン



図5 DIYマーク

タービジネスが発展していく中で大衆化されていく¹⁶。同時に、毛利嘉孝も指摘するように、対抗文化の時代にあって大量生産の生活を見直すためのコミュニティ運動の思想として、特に若者に支持されていく¹⁷。

日本においても1960年代末から若者の間で流行したヒッピーカルチャーは、環境問題が社会問題となる時期と重なり、アメリカ同様にナチュラルなライフスタイルを志向する若者を生み出した。戦後「日曜大工」と称されていた素人による工作は、思想を伴ったDIYへと読み替えられていくことになり、こうした風潮は初期の『私の部屋』にも色濃く表れた。

『私の部屋』では創刊号から「日曜日の工作」というコーナーが設けられ、1973年8号からは鎌田豊成(1936-)の名が記載されている。デザイナー、アートディレクターの鎌田豊成は、このコーナーで〈キラキラ星の夢〉グッドナイト・ランプ(27号)、窓辺のプランターボックス(12号)、ごみ箱(13号)、デッキチェア・テーブル(31号)など、女性にもできる日曜大工を提案し



図6 『私の部屋』13号 1974年

ている(図6)。鎌田が提案するのは、片山と同じくファンシーな可愛いデザインで、かつ廃品などを巧みに利用した日常生活のための木工で、それなりに本格的な工具を用いるものもあった。この時点でもなお、日曜大工は男仕事ではなく女性にも同様にできる手作りとして位置付けられている。この鎌田のコーナーは初期『私の部屋』の人気の連載の一つとして、1977年末(34号)まで続いた。前述のDIYマークが雑誌に用いられたのは「日曜日の工作」連載終了の1977年までであり、同誌の初期の工作記事の中心的人物であったのが鎌田であったことがわかる。鎌田には、手作りによって社会の在り方を問うような思想性は見られず、片山と同様に表面的に可愛いデザインを施したアイデア作品にとどまり続けた。しかし、雑誌の方向性としては、鎌田の作品とは異なり、同時代の対抗文化的手作り観が顕著になっていった。

本来DIYは、男女の区別なく工業化が進み過ぎた中での人間としての生き方を問う思想であり、行為である。既に『ジュニアそれいゆ』『それいゆ』でも、大工仕事は度々女性に向けて紹介されていたが、『私の部屋』でもこの傾向は継承され、さらに、大都会の人工的な生活を捨て、自然の中での手作りの暮らしの提案へと転化していく。創刊号では「BACK TO NATURE いま憧れは、田舎風に暮らすこと」という特集が組まれた(図7)。



図7 『私の部屋』1号 1972年

1974年14号「HANDMADE SPECIAL」では、DIYの精神を次のように語っている。

「お金を出せば買えるものを作っても、あまり楽しさはないような気がします。たとえそれが高嶺の花のモノであっても……。ここがHOBBYとDO ITの別れ道といってよいでしょう。DO ITは必要なものを作るというところから始まるのです。」

そして“この精神の底に流れるものは、反文明的なものへの愛着であり、一種の耐乏主義である”という。こうした思想としてのDIYは、ヒッピーカルチャーに見られるような、男女の共同作業で行う手作りの生活を前提とした自給自足型コミュニティを生み出した。初期の『私の部屋』でも、男女で家を一から造って住むという記事が頻出している。

しかしながら、DIYの暮らしが広まるにつれ、さまざまな手作りの作業の中から、女性たちは自ら性別役割分業を再び選択するようになる。前述の1974年14号「HANDMADE SPECIAL」では、「縫うことの再発見」と題した次のような文章が見られた。

「女のDO ITの得意科目はまずは縫ったり編んだりのソフトな仕事がいちばん。いきなり大工仕事を始めるより、DO ITスピリットはまずそんなところから現実感をもって私達のものになっていくような気がします。キルトのしなやかさは手縫いで、坊やの鉤裂きはミシンが強力な威力を発揮するでしょう。」(手作りスピリット 1974年14号 3頁)

DIYあるいは日曜大工は、男女平等に協力して行すべき手作りの文化として戦後広まったが、女性の手作りがインテリアに向かったことは、必然的に手作りの男性領域に近接していくことでもあった。『ジュニアそれいゆ』『私の部屋』ともに、こうした傾向は色濃く見られる。しかしこのDIYの中で、女性たちは女性領域の手芸を「親しみやすい作業である」という理由で自ら選択していく。同様のことはペニー・スパークも指摘しており、彼女は戦後のDIYカルチャーが夫婦ともに行う作業であるにもかかわらず、「配管管理や電気工事が夫の役割である半面、カーテン作りは妻の仕事」というように、明らかに性的役割分業が存在していることを指摘している¹⁸。「一緒にいることは共有を意味するその一方で、家庭内における労働の性別役割分業を、減少させるよりはむしろ洗練し、向上させる一助となったのであった。」¹⁹と述べる状況は、戦後日本でも同じように見られ、特に次に述べる1970年代後半のパッチワークキルトのブームを契機にそれが顕著になっていった。

3-2-2 パッチワークキルトとカントリーの時代

『私の部屋』におけるカントリーライフ志向は、工業社会批判という思潮の反映の一方で、女性たちのロマンティックなカントリー趣味に因るところも大きく、若い女性のカントリー趣味は、「大草原の小さな家」「赤毛のアン」(74号)のようなアメリカン・カントリースタイルへの憧れも同時に内包していたといえる。同誌では既に1973年頃からアーリーアメリカンに関する記事が目立つようになり、カントリーラ



図8 『私の部屋』44号 1979年

イフを実践する記事も頻出するようになってきている(図8)。これは1980年代になると石山修武が「ショートケーキハウス」²⁰、隈研吾が「清里ペンション派住宅」²¹と苦々しく称したような、郊外の様式混交的なコロニアル風住宅の流行のはじまりであった。「私のカントリー日記」高柳佐知子(14号1974年)という記事では、手書きのスケッチと文字で、憧れのカントリー生活が綴られている。「朝、早起きして。起きられたらはだして飛びだして、草原の中を走りまわりたいわ」と始まるエッセイでは、小説やテレビドラマで間接的に見知ったカントリーライフをイメージしたような、実践と夢想の混じりあった著者の田舎生活が描かれている。手作りという行為はモノのなかった時代に生活を豊かにするものから、憧れのカントリーライフでの必須の行為へとその意味が変化し、アメリカ文化への憧れとともに、女性たちの中に特別な意味を持つようになっていく。そして、こうした趣味を最もよく表しているのがパッチワークキルトの大流行であった²²。刺繍、クッションなど針仕事による手芸の記事は創刊当初から見られたが、間もなくキルトの記事は他を圧倒するようになる。端切れを糸でつなぎ合わせていくその手法は、前述のアップリケと共通点が多い。アップリケにおいて中原が目指した「つくりやすさ」は、カントリースタイルの流行の中で、パッチワークキルトというアメリカ風のデザインに再編されていった。初めはアメリカ的DIYの手作り生活の一要素として紹介されていたが、次第に女性たちの手作り趣味の主流となっていく。これが前述の工作記事の終了時期と丁度重なっている点は、注目すべきであるといえるだろう。キルトを中心とするアーリーアメリカンのカントリースタイルへは、戦前期の良妻賢母主義の中での手作りとは異なる文脈で示されたため、女性たちに憧れの新しいスタイルとして認識された。しかしながらそこでの手作りは、アメリカというフィルターを通して、保守的な男女の性的役割分業を前提とした手作りを受け入れるということでもあった。

キルトに関する記事は特に女性たちの関心を集め、1978年37号からは誌上で「パッチワー



図9 『私の部屋』 37号 1979年



図10 パッチワークキルト・ファンクラブバッジ

クキルト講座」(37～49号 全13回)の連載が始まり(図9), 以後も同様の講座が繰り返された。また「私の部屋 パッチワークキルトファンクラブ」が結成され, 誌上では「パッチワークキルトファンクラブ通信」がスタートし, 愛好者の交流の場となった。DIY マークに代わり, 天使の絵柄のついたマーク(メンバーバッジ)が作られ, 関連記事に付けられるようになっていった(図10)。1978年には別冊『パッチワークキルト全集』が刊行され, 翌1979年には続編も刊行されている。パッチワークキルトを中心としたこの1977年～78年が, 女性の手作りにおけるジェンダーの再編時期といえる。

3-3 手作り生活の抒情性と内藤三重子

1977年31号からは, 「夏の私の部屋から」など, 季節に合わせて読者への巻頭メッセージが載るようになった。1978年35号からは巻頭ページを飾り, 外国の田園風景やカントリー風の住宅の写真とともにポエティックな表現で日々の暮らしのアイデアが綴られている(図11)。そこで前提となっている暮らしとは手作りを中心とした自然に寄り添う生活スタイルである。巻頭のメッセージには, 一人暮らしを始めたばかりの若い女性から, 小さい子供を持つ母親まで, 女性たちへの生活規範が示されており, 『ジュニアそれいゆ』との共通性が見出せる。暮らし方の知恵と, さらにはその背後にある価値観を読者に情緒的に刷り込んでいく状況は全く同じであるが, 『ジュニアそれいゆ』において男性から発信されたメッセージが, 『私の部屋』では女性たちによって, 女性特有の価値観として語られていくようになる。それに伴い, 創刊当初見られた近代的なジェンダーの枠組み



図11 『私の部屋』 39号 1978年

を超えたDIYをはじめとする手作りは、女性的な手芸や料理に限定されるようになっていく。

1978年以降、『私の部屋』の手作りインテリアは、完全に針仕事による「インテリア手芸」中心になっていく。前述のとおり、少女的でメルヘンチックなデザインは男性主導で作られた世界であったが、一旦DIYのような男女平等の手作り志向の時代を経たのち、女性たちはあたかも自分たちが作り出した、男性は不可侵な領域であるかのように、ファンシーな世界を軸に急速な再ジェンダー化を進めた。1977年頃から誌面では男性の書き手が減少し、女性あるいは無記名の記事が増え、誌面の言葉は「女性たち自身」の声であるような印象を強めていく。そうした中、創刊当時から一貫して女性たちに支持されていた人物が、手芸家・エッセイスト・イラストレーターの内藤三重子（1934-）であった。前述の鎌田豊成の妻である内藤は、創刊当初から長年にわたり『私の部屋』に寄稿している。

内藤の手作り記事は、初期には主婦ならではの節約の知恵を盛り込んだ様々な手作りを紹介しているが、1970年代後半になると手作りを中心としたライフスタイルのエッセイが中心になり、次第に抒情的な、生活規範の教えのような面が強く現れるようになる。内藤の手作り記事は、夫である鎌田の工作記事とは一線を画しており、主婦が節約生活の中で工夫した手作りであった。これは昔から女性たちが行ってきた、「女性的な行為」に他ならなかった。そこに内藤は、同時代の社会に見られた文明批判、自然共生といった思想性を加え、さらに新たにアメリカン・カンントリーというコンテクストに読み替えて、手作りから古臭さ、貧しさのイメージを払拭し、アメリカ風のおしゃれなライフスタイルの実践としてみせた。

内藤のエッセイに通底している文明批判は、高度な大量消費時代が到来して便利な生活を手に入れることができた一方で、公害や薬害など環境汚染が問題となり、消費中心型の生活が批判を集めるようになった時期の論調と重なるものである。内藤自身も1960年代末に渡米した際に受けた対抗文化の影響を、後に述懐している²³。自分でするより買った方が早くて安いのも事実であることを認めながらも「大切なことは上手に作るよりも自分で考えて、まず行動することだと思います。作ることに価値があるのです。」（「DO IT YOURSELF」／26号）というように自分で考え、行動することを重視している態度は、まさしくロンドンで始まった思想としてのDIYと同じであるといえる。「豊かな物質文明の世の中で儉約」、「物を大切に生かして長く使う事」「石油問題、高層ビル火災、公害、薬害」（「MY LIFE 儉約ゲーム」／No.52）といった言葉が表すように、彼女の手作りは、確かに新しい時代の思想を反映した考えに基づくものであったといえる。

1970年代に世界各地で起こったフェミニズムの運動は、それまでのような参政権運動など明確なものではなく、家庭の専業主婦の憂鬱などが問題となる。1975年からの国際婦人年を受け、女性の社会的な地位向上の気運も高まるが、若い主婦層が主要な読者となっていく『私

の部屋』においては、工業化への批判はあっても、女性の手仕事を放棄した社会進出に対する意識は低く、伝統的なジェンダーへの固執が散見できる。内藤も、同時代の女性の社会進出により、女性たちの手作り生活の衰退が進んだことを否定的にとらえている。彼女の提案する手作りの実践は、古くなったセーターその他衣類のリメイクや儉約レシピ、銀杏の塩漬けやレモンオイル漬けといった保存食など、古いジェンダーの中で女性が担ってきた労働そのものであり、女性が家庭にいて手間ひまをかけて手作りすることの重要性を説いている。すなわち、内藤の工業化社会批判は、近代以前の伝統的な家庭へ回帰するということの意味していたといえる²⁴。

国際婦人年前後の社会的風潮に対し、日本の多くの女性たちが置かれていた現実には距離があった。内藤をはじめとする『私の部屋』の手作り記事全般が、初期のようなジェンダーフリーのDIY思想から次第に離れ、より「女性化」されていくのは当時の日本の専業主婦率の高さを考えると、当然の帰結であったといえる。1978年前後からの手作りの保守化は、女性たち自らのアイデンティティーを求めた動きであったと捉えることもできるだろう。脱工業化社会の中での自然回帰は、ここでは思想的なものではなく、むしろ憧れのアメリカン・カントリースタイルという方向に流れていった。女性たちは自分たちの存在意義を生産労働ではなく、未だ家庭の中に求めざるを得ない状況にあった。かといって古い時代の良妻賢母主義には抵抗を抱く女性たちには、新たな「手作り」の価値観が必要であった。風土に根差していない、架空のメルヘンチックなカントリー趣味とそこでの家庭的・女性的な手作りの世界観が、まさしくその新たな手作りの価値として意味を持つことになったのである。

4 おわりに 手芸の多義性と女性の手作り

女性の手作りは、インテリアに活かされることになることで、男性領域に接近していった。手作りインテリアには、アップリケのような手芸から日曜大工的な工作までもが混在するようになった。この日曜大工は1970年代になるとDIYカルチャーに継承され、ジェンダーを越境した領域に拡大するが、そのうち女性の手作りは再び手芸に収斂していく。初めは雑誌メディアを介して男性から啓蒙されていた手作り趣味であったが、その後女性たち自身の声となって手作りの「女性化」が進められていった。男性が、余暇にあくまで趣味として役に立たない日曜大工や模型製作を楽しむとは異なり、女性の場合は、社会問題を背景にしつつ女性ならではの手仕事を美化してそれを前提とした生活の復権という、ある種の道徳、規範のようなものを添えながら、その手仕事の正統性を唱えていく必要があったのではないだろうか。工業社会批判と自然回帰の思想はアメリカ文化への表層的な憧れに置き換えられ、女性を再び保守的なジェンダーに基づいた手作りへと向かわせた。ただし、新たな女性観が広まるとともに、手作

りが自己表現の手段になっていくことは、もはや避けられない状況でもあり²⁵、それが現在のハンドメイドブームにもつながっているといえる。ハンドメイドは今日、作り手-消費者を超えた、さらにはアートと手芸の境界をも解体するような、新たな文化を生み出しているといえる。時代とともに変容している「作ることの意味」について、問い直すための課題がまだ多く残されていると思われる。

* 本研究は2015年度～2017年度科学研究費 基盤C「近代日本の手作り」とジェンダー」(研究代表:神野)の成果報告である。

注

- 1 神野由紀「近代日本における少女的表象の生成について——商品デザインの特徴分析から」『デザイン理論』63号, 2013
1950年代～60年代に少女期を過ごし、その後主婦となって手芸を趣味にしていく女性については、既にアンケート、インタビュー調査による考察を行っている。
神野由紀, 中川麻子「デザインとジェンダー:近代の女性における〈手作り〉の意味に関する考察」
関東学院大学人間環境研究所所報13号, 2014
- 2 近代以降の日本の手芸とジェンダーについては山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房, 2005に詳しい。さらに山崎は戦後のインテリア手芸についても「戦後手芸ブームと新たな『主婦』規範」千葉大学大学院社会科学研究所研究プロジェクト報告書第175集『表象/帝国/ジェンダー——聖戦から冷戦へ』, 2008年で詳しく考察している。
- 3 『ジュニアそれいゆ』など戦後の少女雑誌文化については、今田絵里香「戦後日本の少女雑誌文化における『少女』:少女雑誌『ひまわり』『ジュニアそれいゆ』分析を中心に」日本教育社会学会大会発表要旨集録(60)、2008などに詳しい。
- 4 『ジュニアそれいゆ』分析調査は科研共同研究A班(神野, 山崎, 今田, 中川, 溝尻)が行った。
- 5 ここには人形は含めていないが、10代の少女にとっての人形は、遊ぶためのものではなく、部屋のインテリアとして機能していたであろうことを考慮すると、記事数はさらに増える。
- 6 この他、『それいゆ生活の絵本』(1号～8号/1952年～1954年)も適宜参照した。
- 7 中原淳一『ジュニアそれいゆ臨時増刊 アップリケと工作』ひまわり社, 1960, 6頁
- 8 『ジュニアそれいゆ』で少女のイラストを描き人気を博し、ファンシー雑貨のデザインも多く手掛けた。
- 9 『アップリケと工作』では、アップリケ記事36件中、衣服に関するものは13件にとどまった。
- 10 片山龍二『楽しい日曜工作』ひまわり社, 1958
- 11 もう少し年上の若い女性向けの『それいゆ』の別冊『それいゆ生活の絵本』は、特に工作を中心とした手作り記事の特集でまとめられており、別冊特集は8巻に及んでいる。
- 12 加藤秀俊「ホーム・ドライバーと日曜大工——非代理的余暇の問題」『中央公論』75(6), 1960

- 13 中原淳一『ジュニアそれいゆ臨時増刊 アップリケと工作』, 前掲, 6頁
- 14 新聞連載, テレビ放送期間の詳細は不明。その他片山は『アイデア紳士』講談社, 1963年など, 多数の著書を刊行している。
- 15 国立社会保障・人口問題研究所 一般人口統計 人口統計資料集2005年版「性別高等学校・大学への進学率:1950~2003年」
- 16 『社団法人日本DIY協会20年の歩み』(編集委員長:江口英彦), 社団法人日本ドゥ・イット・ユアセルフ協会, 2000
- 17 毛利嘉孝『はじめてのDIY』ブルース・インターアクションズ, 2008, 40-51頁
- 18 ペニー・スパーク『パステルカラーの罫』菅靖子他訳, 法政大学出版局, 2004, 199頁
- 19 同上
- 20 石山修武『笑う建築』筑摩書房, 1986
- 21 隈研吾『10宅論』トソー出版, 1986
- 22 大阪万博の展示に始まり, 1970年代半ばの展覧会開催を契機として日本にパッチワークキルトが紹介され広まっていく様子については片桐真佐子「ジャパニーズキルトの特質 『私』を表現するツール——1970年代後半から80年代を中心に——」(京都造形芸術大学大学院 2015年度修士論文)に詳しい。
- 23 内藤三重子「毎日の時間」(永井宏『ロマンティックに生きようと決めた理由』)アノニマスタジオ, 2006
村椿菜文『内藤三重子さんのこと』アノニマスタジオ/KTC中央出版, 2005
- 24 内藤三重子と『私の部屋』については, 本人へのヒアリングなども含めて今後さらに考察が必要である。
- 25 このことを示すように, 『私の部屋』では, 女性が趣味の手作りの店を持つという特集記事が多く見られた。『ジュニアそれいゆ』世代(2014年にインタビュー調査を行った世代:注1参照)が, お金を儲けることに対して強い忌避感を持つのに対して, 『私の部屋』世代は, 趣味の範疇であっても経済活動をして自己実現したいという欲求が強く見られるようになっている。